

■アメリカ紀行

C.K. ドージャーの足跡を訪ねて

前企画広報課長 高松 千博

●はじめに

アメリカ合衆国におけるC.K.ドージャー（以下「ドージャー」という）の足跡を訪ねることになったのは、学院創立70周年（1986年）記念行事の一環として、ドージャーの生涯のビデオ（当時はDVDなどなかった）を作ることになったからである。20年前のことになる。当時の写真や資料は残っているが、私は、プライベートに随行したので詳細な報告書等は残していない。記憶をたよりに記述するしかない。

ビデオの制作は、本学の卒業生（'59年卒）で、テレビのドキュメンタリー番組を手がけていたRKB毎日放送の木村栄文氏にお願いした。当時、テレビドキュメンタリー部門で数々の賞を受賞し、「受賞男」の異名を取っていた。アメリカ取材には、RKB毎日放送のスタッフであった木村氏とカメラマンの木村光徳氏、音声担当の藤木大二郎氏、そしてコーディネーターと通訳を担当いただいたロイス・ホエリーさん（第14代院長C.L.ホエリー氏夫人）と広報課員であった高松の5人があたった。1986年7月2日（水）から11日（金）まで10日間の強行軍であった。

出発日は成田からアトランタ（ジョージア州の州都）へJAL直行便が就航する日で、記念すべき第1便に搭乗した。

●7月3日：マーサー大学と生家

取材の初日、まずドージャーの出身校であるメーコン市のマーサー大学（現在、本学の協定校）に車で向かった。同大学は、バプテスト派の名門校である。アトランタからメーコンまでは約120キロの距離である。キャンパス内にはドージャーが学んだ頃の建物も残っており、ドージャーが寮生活を送ったと思われる





歴史を感じさせるマーサー大学の建物

部屋も残っていた。グッドシー学長自らその部屋を案内してくれた。当日は、マーサー大学の卒業生が創立した西南学院の大学のスタッフが取材に来ているということで、地元のテレビ局から逆取材を受けた。残念ながらその放映を見ることはできなかった。

マーサー大学での取材を終えてアトランタへ戻ったが、そのままラ・グレインジュに向かった。ドージャーの生家があったと思われる地を訪ねるためである。その場所と思われるところには生家はなく、アパートが建っていた。

●7月4日：独立記念日

7月4日はアメリカの独立記念日でアトランタでも様々な催しが行われていた。繁華街の目抜き通りでは祝賀パレードがあり、大いに盛り上がっていた。この日は、RKBのスタッフとアトランタ郊外の美しい街並みを撮影した。

●7月5日：M.E. ドージャーさんとアデリア A. ドージャーさん

アトランタ近郊にドージャーのお孫さん（E.B. ドージャー夫妻の3女）のアデリア A. ドージャーさんを訪ねたが、お母さんのM.E. ドージャーさん（E.B. ドージャー夫人）もかけつけてくれた。アデリア A. ドージャーさんが保管しておられたアルバムから貴重な写真の数々をコピー（写真の接写）させていただいた。M.E. ドージャーさんは、義父ドージャーと夫E.B. ドージャーの思い出を語ってくれた。



左から M.E. ドージャーさん、ロイス・ホエリーさん、
アデリア A. ドージャーさん

義父ドージャーが好きだった讃美歌もピアノで弾いてくれた。

●7月6日：第一バプテスト教会

ドージャーがバプテスマ（浸礼）を受けたゲインズビルの第一バプテスト教会を訪ねた。本学のランキン・チャペルほどの広さがありそうな大きな教会であった。日曜日であったので、スタッフ全員、日曜礼拝に参加させてもらった。教会は1960年に火災にあっていた。ドージャーがバプテスマを受けた記録を記している教会の総会記録も、火事のために表紙がボロボロになっていた。総会記録には、バプテスマを受けた人の氏名なども記載されていた。ドージャーと並んで次兄のバルトン・ドージャーの名もあり、2人は一緒にバプテスマを受けたことが判明した。1892年、ドージャーが13歳の時である。ホエリーさんが記録の記載を見て、ドージャーのミドルネームである「Kelsey」が「Kelsie」となっていることに気付いた。当時の記録は全て手書きであり、単純な記載ミスだろうと思われた。



堂々たる第一バプテスト教会



第一バプテスト教会の総会記録

午後には、翌日の訪問先である南部バプテスト神学校があるケンタッキー州ルイヴィルへ空路、移動した。

●7月7日：南部バプテスト神学校

ドージャーはマーサー大学を卒業後、南部バプテスト神学校に入学する。入学の年に生涯の伴侶となる M. A. バークと出会っている。同校は高台にあり、広々としたキャンパスと歴史を感じさせる建物がマッチした素敵な神学校である。6日の夕刻に到着したが、高台のキャンパスから望まれた夕日の美しさが印象に残っている。当神学校では、ドージャーの卒業アルバムや学位 (Th. M) の記録などを見せてもらうとともに、ドージャーがバークと学生生活を送ったキャンパスや校舎などの撮影を行った。

午後からは、最後の訪問先である南部バプテスト外国伝道局があるバージニア州リッチモンドへ空路、移動した。

●7月8日：南部バプテスト外国伝道局

南部バプテスト外国伝道局は、世界各国に南部バプテスト派の宣教師を派遣する拠点である。玄関を入ると正面に置かれている天井に届きそうな大きな地球儀も、その役割を象徴している。ドージャーは西南学院を創立する際に幾度となく伝道局と手紙で連絡を取っている。伝道局の資料室には全ての宣教師に関する膨大な資料が保管さ



広々とした南部バプテスト神学校



宣教師の資料が整備された伝道局資料室

れていた。その中からドージャーと夫人の資料を閲覧させてもらい、ドージャーが日本から伝道局に宛てた手紙などのコピーも貴重な資料としていただくことができた。その中には、ドージャーが西南学院創立の喜びを伝道局に伝える手紙も保管されていた。手紙の他に、ドージャーの日記なども保管されていた。

●7月8日：C. ドージャーさん

7月8日の午後、ドージャーのお孫さんであるチャールズ・ドージャーさんが、遠路、ワシントンD.C. から車でかけつけてくれた。日曜日問題について「祖父は、アメリカで育ったので、問題の核心を突くアメリカ流の方法で解決しようとして摩擦が起きたのだと思う。父は日本で育ったので周囲に気配りをしながら問題を解決する日本流のやり方で進めたので、摩擦が起きなかったのでしょうか」と冷静に分析してくれたのが印象に残っている。

●7月9日：アトランタの休日

アメリカ到着以来、取材と移動でハードなスケジュールが続いたが、最後の1日はゆっくりとアトランタの休日を満喫することができた。アトランタ郊外にはハナミズキがたくさん植えられている。アトランタシティのことを別名ドッグウッドシティとも言うが、ドッグウッドとはハナミズキの別名でハナミズキの樹液が犬の皮膚病に効くことからそう呼ばれるようになったとか。ハナミズキは5月頃に美しい十字の形をした花を咲かせる。ジョージア州の花でもある。ドージャーの出身地であるジョージ



左から木村栄文氏、二人おいて筆者、ロイス・ホエリーさん
(レイヴルの空港で)

ア州の花で十字の花を咲かせることから、ハナミズキを「西南の花」にしてはどうかと私は思っている。

●終わりに

アメリカ訪問は初めての企画であり、貴重なことは間違いない。しかし、目的がビデオ制作であり、ドージャーに関係する人達や施設等の映像、関係者の声を収録することが中心であった。そのために、やむをえないことではあるが、学院史という視点からの資料収集という点では不十分であった。今後、西南学院百年史の編纂が進められることになると思うが、どのような資料を収集したいのか、事前の準備を十分に、再度アメリカにおける綿密な資料収集を行なう必要性を痛感している。ドージャーの他にも西南学院に関係した宣教師関連の資料収集が必要であろう。そしてもちろん、それらの資料のほとんどは英文なので翻訳も必要である。

最後に、既に逝去されているが、取材旅行のために時間と労苦を惜しまずにご協力いただいた M.E. ドージャー女史、ロイス・ホエリー女史のご冥福をあらためてお祈りしたい。